

心室細動を繰り返し生じ、治療に苦慮した自閉症スペクトラム障害を合併した Brugada 症候群の 1 例

本池雄二 渡邊英一 長坂 遼 野村佳広
越川真行 原田将英 尾崎行雄

【症例】16歳男性。【現病歴】自閉症スペクトラム障害のため、知的障害を伴っていた。20XX年Y月、就寝中にいびき様呼吸を認め、救急要請された。自動体外式除細動器(AED)により心室細動と診断され、直流除細動を行い搬送された。12誘導心電図でV₂誘導でcoved型ST上昇を認め、Brugada症候群と診断した。植込み型除細動器(ICD)が考慮されたが、患者自身の理解が得られないため、薬物治療(シロスタゾール)を行い、自宅にAEDを設置し経過を観察した。6ヵ月後、心室細動の再発を認め、自宅のAEDを使用して蘇生に成功した。ICDを再度検討し予定していたが、待機中に心室細動の再発を認めた。キニジンを開始し、全身状態が改善した後、皮下植込み型除細動器(S-ICD)を植込んだ。以後、心室細動の再発を認めず経過している。【考察】知的障害により患者の理解が得られないため、ICDは合併症のリスクが高いと考えられた。S-ICDはリード関連合併症を回避できる可能性があり、本症例においてよい適応と考えられた。心室細動を短期間に繰り返し生じており、発作の予防のため、濃厚な薬物治療が必要と考えられた。

Keywords

- Brugada 症候群
- 自閉症スペクトラム
- 皮下植込み型除細動器

藤田医科大学循環器内科
(〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1番地98)

*A Case of Brugada Syndrome Suffering Repeated Ventricular Fibrillation Complicated by Autistic Spectrum
Yuji Motoike, Eiichi Watanabe, Ryo Nagasaka, Yoshihiro Nomura, Masayuki Koshikawa, Masahide Harada, Yukio Ozaki*